中村の七不思議の石、梁木石（はりきいし）

昔、中村に由蔵という薪切りの達人がいた。ある日、大夫沢で木に登り、木を切り始めた。当時はまたノコギリがなくマサカリ一丁で薪切りをしていた。由蔵がふと見ると、木の根元に白いキツネが一匹倒れていた。気の毒に思って由蔵が抱き上げたところ、そのキツネはうしろ足に傷を負っていた。由蔵はそのまま家に帰り、傷の手当をしてやり、食べ物を与えてやると、キツネは四、五日すると歩けるようになった。傷がすっかり治ったのを見て、由蔵は大夫沢の林にキツネを帰してやると、キツネはうれしそうにうしろを振り返りながら林に消えて行った。

やがて秋も深まり、冬ごもりに備えて由蔵は薪切りに精を出していた。ある日、ひと休みしようとしたところ、近くで身の丈七尺もある山オジが、由蔵の薪切りを見つめている。驚いた由蔵はマサカリを捨てて一目散にわが家へ逃げ帰った。

何日かして、おそるおそる大夫沢へ行ってみると、由蔵が切った薪が積んである近くで、山オジが由蔵が捨てて行ったマサカリを一心不乱に振りおろし、木を切っている。その速いことといったら、見る見るうちに一張、二張と切り出しては割り、割っては積み重ねる。ふとあたりを見ると、キツネが一匹、頭をこっくりこっくり振りながら、山オジのすることを見つめていた。

しばらくして、山オジは積み重ねた薪を運び出そうと手に抱えた。山オジは顔をまっ赤にして持ち上げようとしたが、薪はびくともしない。山オジはとうとうあきらめてマサカリを放り出し、ほうほうのていで岳（だけ）（森吉山）へ逃げ帰った。由蔵がその薪に近づいて持ち上げようとして驚いた。それはそのまま石になっていたのである。いつのまにかキツネも姿を消していた。

由蔵は「これはきっと、このあいだ傷の手当をしてやったキツネがしたことにちがいない」と思った。あのときの恩返しに、山オジをこらしめてやったのだ。由蔵はうれしく思いながら家路についた。以来山オジは二度と

大夫沢に来ることはなかった。いまでも大夫沢の鈴木憲庸所有の山林に、張積の割薪の化石がある。このほかにも、動石（ゆるぎいし）、駒爪石（こまつめいし）、笠（かさ）ぶり石、マサカリ石、大石、瘡石（かさいし）など、中村には七不思議の石がある。